

うしお

第 60 号

目 次

3 4, 3, 3 1

第7回漁村青壮年婦人 研究グループ全国大 会に出席して...	水産課	志賀正昭	1
南方の瀬魚漁業	漁業部	竹下克一	3
煮干いわし油燻防止試 験(第1報)	製造部 { 県漁連	藤田 薫 春口 初	12
ノリ糸状体の培養管理 (1)	養殖部	新村 巖	15
奄 美 短 信		大島分場	17
各 部 の 動 き		編 集 部	18
分 場 日 記		大 島 分 場	23

鹿児島市塩屋町十八番地の七

鹿児島県水産試験場

第7回漁村青壮年婦人研究グループ
全国大会に出席して

水産課 志賀正昭

釣天狗という言葉があります。誰よりも自分の釣がうまいと思
っている人のことを言うのだそうですが、米作り天狗とか芋作り
天狗とかは聞いたことがありません。

この様な釣(漁)の名人が多い漁村で、お互いに知らせ合う集
い、自分の秘技を話し合うように習慣を改めようとしても、なか
なかうまくいかないのも無理はありません。

イカの餌木のことになると気狂いみたいに真剣になる人が、他
の釣のことには興味がないということがありますが、イカ釣りの
研究をする位に他の漁業についてもいろいろな方法を試みる必要が
ありましよう。このイカ釣りの妙技についても、なかなか他人に
は公開しないのが現状です。

菊正宗のこうじ作りの秘伝は専売特許ものかもしれませんが、
釣りの技術はもう宣売特許に変えてもよい頃と思います。人が月
へ飛ぶ時代に、いつまでも前時代的な考えでは、ますますとり残
されてゆくのみです。「私だけが知っている」というのは、テレ
ビ番組だけで結構だと思えます。

このような時代の要請から、全国漁村の研究グループの人達が
一同に集つて、各地方の秘められた技法、新しい技術の研究実
績発表を行うようになっていきます。

今年の第7回全国大会には、坊泊水産振興会と里村水産研究会
が本県代表として出席し、私も同行する機会を得ました。その時
感じましたことは、みんなが漁業の近代化、合理化に真剣にとり
組んでいるということです。

それと同時に、漁村の浦々のグループ活動をもつと盛んにして
各県との交流も深めて、鹿児島島の後退性を少しでもバンカイした
いものと思いました。

又、漁協婦人グループの活動も活発になつてきているようです。漁師の女房という存在から、床柱的存在に実力を養いつつあり、漁協の組織をバックに共同加工、販売、生活改善等奥さん方の新しい勢力はぐんぐん広がつていくようです。兵庫、岡山、広島、愛媛、静岡県等は、グループ活動の先輩格で、生活部内の分科会では関西辯が巾をきかしていました。広島では、女性が漁に出るどとがあたりまえのどとに見られているぞうです。

女が漁に出る為には漁業能率を低下するどとはなにかと思つていましたら、むしろ逆で「あなたもつと沖へ出まじよう」といふことになるぞうです。江田島から街(市場)へ共同出荷する場合の舟の中の往復7時間が、グループの話し合の場となることと、リーダーになる人が気をきかせば、話し合の場はどとにでもあるものと思われます。

また、漁業の分科会(テーマは漁業経営のありかた)増殖の分科会でもる漁業からつくる漁業へ)でも言られることとは、国や県の研究機関と漁村が、連けいをよくとつて、新しい技術をどいどし取り入れていかなければならないといふこととです。

漁協の役職員が、水産試験場の場所も知らないといふことではいけません。それと、漁業者の方々が常に研究的に仕事を行ない、又、気の合つた同志2、3人でもよいがら、話し合の機会を作つていくといふことが大切なことではないでせうか。ある人の話で、今の時代は競走でも共走でも寝ぐで協走でなければならぬといふことを聞きました。

今日、都会で働く青年と漁村に残る青年どが同じ程度の生活ができるようにするためには、農漁村の構造を改善していかなければならないといわれています。そして、漁業者は少しづつの資本でも寄せ集めて、生産の近代化、合理化を計つていかなければとうてい都会の景気にはおいつけそうもありません。

南方の瀬魚漁業

大分県水試の調査結果を報告する。漁業部 竹下克一
(注)

鹿児島県の瀬魚漁業は小型船を主体とした漁業で台湾、沖縄、八重山群島方面まで出漁する漁船もないわけではないが、沿岸或は七島周辺で操業するものが大部分である。

昔の底延縄漁法が、ノ本釣漁法に変わって漁具を漁礁に絡ませて紛失することとも少く漁獲も多くなつたようであるが、漁船が小型船である為漁場もその行動海域もおのずから限定される。然し眼を広く転ずれば瀬魚漁場は近海の薩南諸島海域だけでなく南方海域には無数の魚礁や浅所が点在しており、そこには多くの有用魚が棲息している事は相当昔からまぐろ延縄船がまぐろ延縄を瀬に絡ませてまぐろならぬ瀬魚を釣鉤にあますところなく漁獲した事などが知られていたが、本格的にこれを獲ると言う試みはなかつたようである。然しそれが全然なされなかつたと言う事ではない。

冬期がつか漁船の休漁期に小笠原群島方面で操業したり、又、2～3年前には四国高知県水試の試験船が100吨の大型船による南方瀬魚ノ本釣漁業を試みたが、思わしい結果は得られなかつたようでその後中止されている。然し、昨年(昭和27年)に到り大分県の試験船泉潮丸が南支那海で試験し、割合な好結果が得られるに到つた。

我が鹿児島水試でも相当前からなんとか南方の瀬魚漁業の開発をなそうではないがとその下準備がなされつゝあつたが、予算やその他の面で延び延びになつていたが東海のさばはね釣漁業が衰微するに到り、これら漁船の代替漁業としてもまぐろ延縄漁業等の如く許可等の必要でない瀬魚漁業の開発が急がれ、やつと本年2月～3月にかけて第1回目の調査を実施出来るまで

に到つたのでそのあらましを記述したい。

始め、この計画を作製するに当り、過去の100吨級大型瀬魚/本釣漁業があまり香ばしい結果ではなかつた理由や、今後予想される問題点を次の様に考慮して計画を作製された。

I 過去に南方海域の瀬魚漁業を実施した大型船は島近くで操業していた為、外国との領海等の面からも漁場が制約され、充分な操業が出来なかつたのではないか？それで領海等の問題の少ない海域という点から南支那海が適當ではないか、南支那海ならばフィリッピン線のフィリッピンラインを除いても、支那大陸寄りの100尋線、南北ベーカーバンク、東、西沙群島、マックレスフィールド礁、新南群島その他点在する無数の浅所等、漁場と思える海域が相当あるからこの海域の瀬魚漁業の開発をはかるべき事

II 南支那海迄出漁出来るような漁船は、最少60吨級以上の船でなければならぬ。過去の1、2の実績では、その点漁船の吨数に似合うだけの漁獲量は得られず、非常に漁が少くやつと漁価が割高の為大きな赤字はまぬかれたと言う程度と聞及んでいる。

そこで我々は、大型船による瀬魚漁業に現在使用されている/本釣漁法が、はたして良い漁法であるか否か検討する必要があるはしないか？さばはね釣漁船やかつお竿釣漁船の様に同じ漁夫各々の釣手によつて釣る漁法でも、さばはね釣やかつお竿釣は多人数、即ち4、50名~7、80名の漁夫によつて、しかも表面の眼に見えている魚群を釣られるのに、これが瀬魚の場合、/本釣漁法によれば10吨~20吨の瀬魚漁船であつても10名程度釣手が乗れるのに、100吨級であつてもせいぜい12~13名程度の漁夫でしか釣れない。その上何拾m或は何百mという深い魚群を12、13名程度で釣つては、如何に魚群が多かつたとしても大型船で採算に合う様

な漁獲は得られない。そこで何とかノ本釣漁法に変わる漁具を
考察すべきであろう。そこで我々は

(イ) 従来ノ本釣漁法で漁艇(1~2屯)を運んで行つて操
業する方法、これは高知県水試で実験して漁艇の方が本船
より漁獲は良かったが、時化の為漁艇で操業出来る日が非
常に少い事を、5、60屯~100屯級では漁艇を運ぶ事が無
理ではないかと言ふ点で見込は薄い。

(ロ) 網による方法
この方法ならば割合良いのではないかと考えていたが、
然し、南方海域では海が非常に明るいから魚の掛りが悪い
のではないか、又岩礁地から普通の三重網では駄目で特別
な設計が必要であろうと考えていたが、先日(昭和36年
1月~2月)大分県水試の黒潮丸が北洋のサケ、マスの古
網を改良して南支那海で使用したところ網を破損して(サ
メによつて破損した)漁は少なかつたと聞及んでいるが詳
細は不明である。

(ハ) 延縄による方法
この方法が近年ノ本釣漁法に変わったのは、漁獲能率がノ
本釣に劣ると言う事よりも、漁具を捨てる事が多いと言う
事に大きな原因があつたのではないか、漁具を捨てないよ
うな延縄を考察すれば1日に延べられる釣数は相当多く入
れられ、1日少くとも3,000本の釣鉤を入れられるのでは
ないかと考え、それでとりあえず改良底延縄で試験調査を
する事にした。これは後で述べるように割合好結果が得ら
れた。

Ⅲ 次に大きな項目として考えなければならぬ点は、現在瀬
魚は近海物として鮮度が良く入荷量が少いので割高であるが、
南方瀬魚が多量に入荷するようになれば魚価が相当安いので
はないか、又、そのようになれば鮮魚向けだけでなく、まぐ

るの様に冷凍して輸出方面に販路を見出し価額の安定をはからなければならぬ点である。

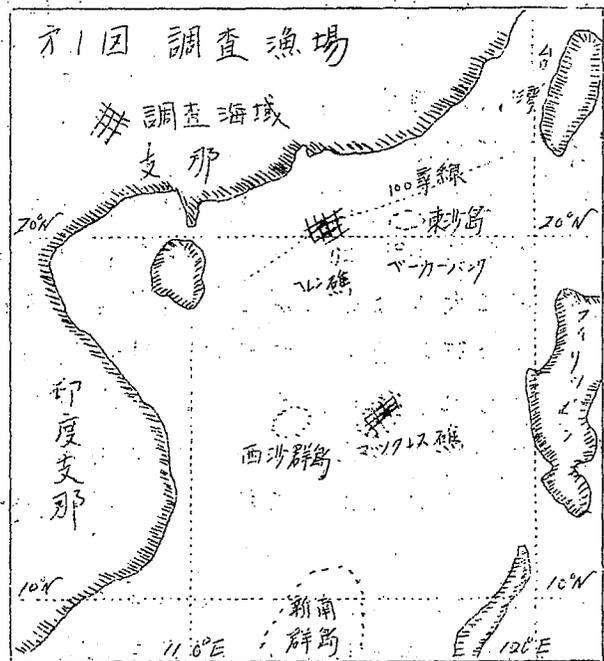
(二)

以上の様な事から次に記す様な要領で南支那海の瀬魚調査を実施したのでそのあらましをこゝで報告したい。

- I 1. 使用した試験船 試験船 照南丸 58.93噸 300馬力
2. 調査期間 昭和35年2月1日～3月2日迄
3. 操業期間 12日間
4. 使用した漁具 (イ)従来ノ本釣漁法
(ロ)改良底近縄
5. 乗組員 船員22名
調査員2名

II) 調査海域の状況

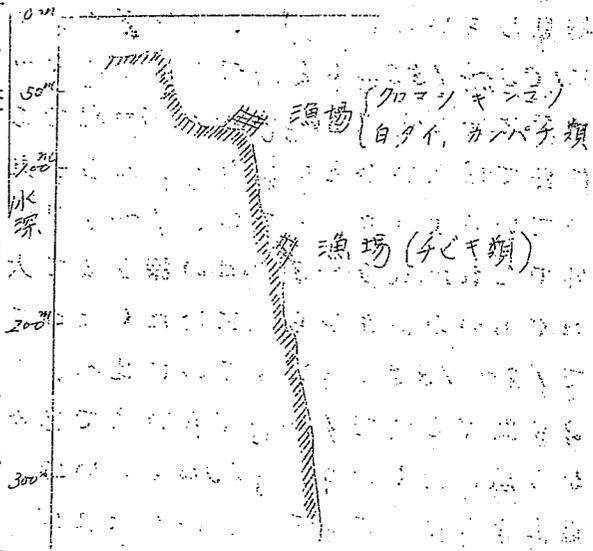
図(第1図)の様に、始め支那大陸寄りの100尋線で調査操業したところ思つたよりこの100尋線附近は漁礁が少なかつたようである。然し、水深100m内外にはカンパチ、マタイの群が、水深150m内外ではチビキ、キンギヨ等が漁獲されたが量が非常に少なかつたので1日間の調査だけで次のマツレス礁の調査に向つた。後で考えてみるとこの100尋線には潮時と漁場



の選び方が良ければ

オズ図 マツクレス礁に於ける好漁場の輪廓型

カンパチの相当の群があるのではないかと思われ今後の調査に期待がもてる。というのはマツクレス礁の操業の場合、図(2図)の様にクロマツ、ギンマツ、ホタテ、白タイ、カンパチ等は浅い所から急に深くなる縁で漁があり、平坦な所や徐



々に深くなるような所では漁は無かった。又、同一漁場でも1日のうち漁のあるのは1~2時間の間でその時間はまちまちであるが、一般に朝マシメ及び夕マシメ前後に最も漁が良く、夜間は22~23時頃(内地時間の20時~21時頃)迄漁が良く、最夜中或は最昼間は漁は少なかった。

次に今まで、他船の調査ではホタテの漁は無いと考えられていたが、今回は150~160m前後で少し漁獲された。然しこの150~160m内外の水深と言うのは第2図でも明かなように、急に切立った中腹でうまくこの水深に漁具をもつて行くのは非常に困難である。今度の場合でも船が潮の為に浅所から深みへ、或いは深みから浅所へ流される時に偶然と言って良いほど漁具がその水深にあつた時のみ漁獲されたものであつた。

潮の流れが浅所から深みへ或は深みから浅所方面へではなく同じ水深に沿うて流れれば良いのであるが、そのような都合の良い潮流はなかつたようである。

次に南方の瀬魚は、九州近海の瀬魚漁場に比べ浅い水深に棲息している。例えば、マツダイ、ホタ等は七島海域では主に100~150mぐらいであるのにマツダレス礁では70~80m戸にチビキでも150~160m程である。これは底の水温の関係ではないかと思われる。即ち、九州近海の黒潮の常に流れているような漁場では、1~2月頃の水温表面で21度内外でこれが200~300mの深さまで大差なく続いており300mぐらいの深さから急に冷たくなつて、400~500mの深さまで12~13度ぐらいあるのに比べ、南支那海では表面は23~24度ぐらいで100mぐらいまで徐々に下り、150mぐらいから急に冷くなり、300mぐらいで12~13度と表面は九州近海より高温であるが、深くなれば南支那海の方が非常に冷たくなつている。即ち、近海の300mぐらいの水温は南支那海では150mぐらいの深さの水温である。この事が魚群が浅く棲息していると思え、南方の瀬魚の場合この棲息水深が浅いので非常に漁業する上に有利となる。

又、魚種は九州近海の魚種と変わりなく、大きさも近海物とあまり変つていないようであるが、アラの類が割合小型で全長50cm前後のものであつた。

今回照南丸が漁獲した魚種並びに尾数は次の表の通りで、主にクロマツ、ギンマツ、シロダイの類のホタは割合少なかつた。

漁獲表

魚種 \ 漁具	/ 本釣漁法	改良底延縄	計
クロマツ	300	401	701
ギンマツ	91	226	317
アラ	78	74	152
白ダイ	76	302	378
アオマツ	29	48	77
ヒラアジ	12	11	23
シマアジ	6	25	31
カンパチ	10	14	24
チビキ	16	21	37
ホタ	4	22	26
その他	85	89	174
計	707	1233	1940
延使用時間	86,3 ^{時間}	59,0 ^{時間}	
延使用技数	1277	1548	
/時間当漁獲尾数	8,2 ^尾	20,9 ^尾	
/枝当り平均漁獲尾数	0,55 ^尾	0,80 ^尾	

注 / 枝当り漁獲尾数とは、延縄の場合 / 技（釣鉤5本） / 本釣の場合 / 名 / 回当り（釣鉤6本）

Ⅲ 漁具及び操業方法

漁具は従来のノ本釣漁法と改良底延縄を使用したが、ノ本釣漁法は普通の漁具と変りはないので省略して、改良底延縄について述べると、第3図のような構造でこれはまぐろ延縄を利用し、これにノ本釣具のテグス釣鉤の部分を取付け、ガラス玉で幹縄が底に付かないよう浮上げているだけのものである。

操業方法は、前もつてテグスの部分だけを切放して餌を付け箱に収めておき船を微速前進させながら縄を延べる。この時枝縄とテグスの部分を連結しガラス玉を付けながら入縄を行う。揚縄は、普通のまぐろ延縄と同様の要領で微速で揚げるこの時テグスと枝縄とは切放して、テグスだけ再び箱に収め餌を付け次の枝縄の準備をなす。

入縄から揚縄までの時間は30分ぐらいが適当で今回は試験的に操業したので縄は1回に5鉢（枝数で30本）しか使用しなかつたが、本格的に使用すれば10鉢～15鉢ぐらいが適当ではないかと考える。これは投縄に必要な時間が5鉢で10分内外であるから、15鉢使用すれば30分内外必要となり縄を入れ終つた時はすぐに入始めの所から揚縄が出来、時間的に無駄がなく、1日に使用出来る漁具数を多くする事が出来る。少くとも1日に10回以上は入縄が出来ると思える。

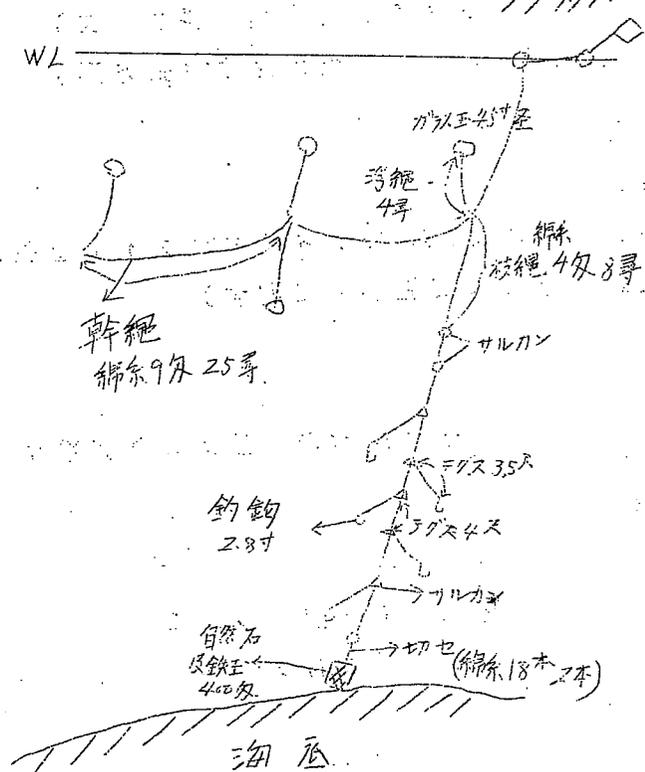
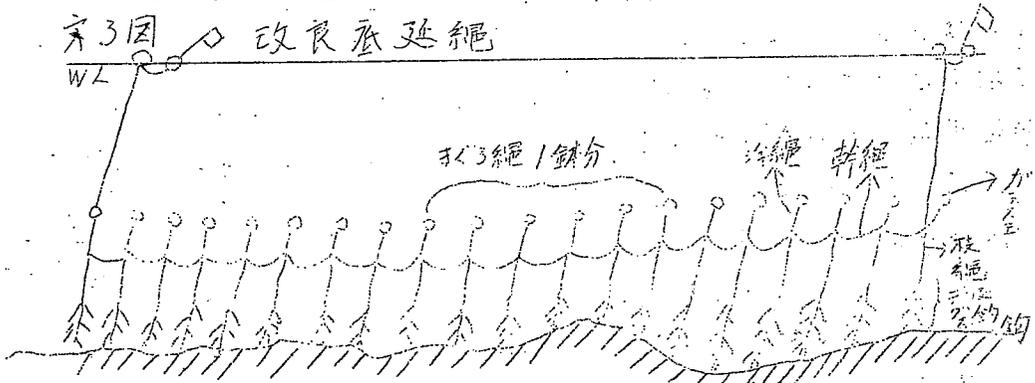
漁獲能率の方は前の表でも示したように、ノ本釣の場合1名1縄当り平均0.55尾に対し、縄の場合1技当り0.80尾、又、1時間当りの漁獲尾数は、ノ本釣の場合8.2尾に対し、縄の場合只の5鉢使用したにかゝらず209尾と倍以上に縄の方が良い。

最も縄で漁の良かった時は5鉢で（枝数30本）1回に7.3尾漁獲した時で平均2.5尾内外の漁であつた。

若し、このような計算通り今後縄で漁があるものとするれば、大型船による瀬魚漁業も採算が合いそうな漁獲が得られるものと思えるが只/回の調査では確信は出来ない。

只、縄の場合幹縄を礁にかける事は今回は只/回あつただけで捨てるような事はない。鉄玉とテグスの紛失が/本釣より多かつたが、鉄玉は自然石に替えれば良い事で、テグスの紛失もそう多額の金額とはならないだろう。

図3 改良底延縄



煮干いわし油焼防止試験（第1報）

製造部 藤田 薫
県漁連 春日 初

主 旨

煮干いわしの品質向上を目的とす

多脂期における煮干いわしは、製造途次既に油焼を生じ時には製了后時日を経ずして急激な酸化状態が見られ、商品価値の下落は言う迄もなく甚だしきは肥飼料として原価を割った価格で取引されている。従つて、之等品質低下防止の見地から昨年来塩干魚に効果を見つゝある。乳状抗酸化剤を使用し、酸化防止の適否を試みた。

実施期間	昭和36年1月7日～2月6日
実施場所	日置郡東市采町
供試原料	片口いわし 中・小羽
供試薬品	タイリヨウダイヤ（小川香料K、K）
煮 熟 釜	約100ℓ入角釜（深さ250%長方形）

試 験 区 分

- A、 $\frac{1}{500}$ 薬品使用
即ち100ℓの煮熟水に200gのタイリヨウダイヤを混入攪拌し煮熟す。（煮熟方法は実施要領に記す）
- B、 $\frac{1}{750}$ 使用
- C、 $\frac{1}{1000}$ 使用
- D、対照区として薬品使用せず通常の方法により煮熟す。

実 施 要 領

1、試 料

地先水面において巾着網にて採捕の極めて新鮮な原料を使用す。水洗いは換水しつゝ簡単に行う。

2. 煮 熟

各試験区分により煮熟す。即ち沸騰寸前の煮釜に試料を入れ（投入后沸騰泡の程度、此の間約3分）煮熟す。

3. 乾 燥

日乾により約10日（曇天のため）間実施す。

4. 保 蔵

観察試料として紙袋に入れ室内に放置す。気温4°C～18°C

試 験 結 果

1. 下表の通りで、乾了時既に対照区との格差が見られ、製了后5日目においては其の格差著しく、対照区にあつては歴然たる酸化状態を認めしたが、試験区にあつては1部、黄色油分の浮出を認める程度であつた。製了后10日目各区分共若干の酸化進行を認む。

製了后20日、対照区の酸化著しく商品価値喪失の感あり、試験区においては酸化停止の状態にて対照区製了時と大差認めず、其の効果は明瞭である。

2. 使用量による変化

製了当時は0即ち $\frac{1}{1,000}$ 使用の分が最も良く、他の試験区A・Bを押えていたが、10日目において3区分の判別困難となる。以後は対照区を除き区分間の相違認めず。

3. 観 察 表

区 分	製了時	5日目	10日目	20日目	記号
A、 $\frac{1}{500}$	—	+	+	+	— 良好 + 黄赤色
B、 $\frac{1}{750}$	—	+	+	+	++ 完全なる酸化 状態
C、 $\frac{1}{1,000}$	—	—	+	+	+ 浮出脂肪黄変 ++ 油分赤色赤化
D、対 照	++	+++	+++	+++	

4. 製品について（入札業者の意見）

価格差については製了時入札の節、試験品は製品少なきため参考品として出品し、入札を実施した結果対照品（中、小羽混合品） Kg 当り140円の入札価に対し、試験区（魚体同一）は其の1割4分高即ち Kg 当り160円の価格表示がなされた。（註）入札業者 20名 集荷 1万 Kg

考 察

1. 煮干いわしに対する抗酸化剤（乳剤）の効果は僅か1回の試験実施について断定する事は危険であるが1応期待通りの効果を見た。
2. 使用量については今次製品の時日の経過に伴う変化を観察し、更に数回試験を実施しないと断定し難いが、大体 $\frac{1}{1,000}$ 程度でも効果があると考えらる。
3. 薬品価格の製品に及ぼす影響

タイリヨウダイヤは1 Kg 当り1,100円であり、使用量其の他から考えて従来の薬品に比しかなり高価なものである。加工経費との関係は、工場規模、日産量により一概には言えないが、東市来の場合1釜の水量が約100 ℓ で、大漁時1釜で約300 Kg を煮上げている。此の場合、さし水として100 ℓ を追加する。従つて使用薬品は $\frac{1}{500}$ の場合400 g となる。之が製品価格に占める割合は、歩留26%として Kg 当り5.65銭弱となり、左程問題にはならないが1日300 Kg の加工はたまにしかなく、時には1日30 Kg 程度煮熟する事がある。此の場合煮熟水は100 ℓ で薬品使用量は200 g となり、製品1 Kg 当りは約30円となる。 $\frac{1}{1,000}$ でも15円となりかなり高いものと言へる。従いて、この様な作業状態の外では、煮熟用水に薬液を投ずる方法でなく、前処理（水洗を兼ねる）として薬液をくぐらせる別法に油焼防止の効果どれ程あるか之は今後の試験課題としたい。

ノリ糸状体の培養管理 (1)

養殖部 新村 巖

ノリ養殖も終期を告げ、気がかりにしていた人工採苗の果胞子付けも2~3月に済んで一段落したこの頃です。

そして糸状体の存在が肉眼でポツポツみられるようになり、糸状体の培養にも楽しみが出てきました。この4~5月は糸状体がよく成長する時期で、秋に良い胞子を早くたくさんつくるには今のうちに早く伸ばしてやるのがコツです。次に注意すべき2、3の点について記してみます。

1. 光線の明るさ

トロ箱の水温が20度になるまでは少々明る過ぎても害は出ません。特に成長の遅れているもの(まだ肉眼で糸状体が見られないもの)は今のうちに直射光線の当たらない明るいところに置いて成長をうながして下さい。

2. 水 温

水温15~20度位が生育に適しています。3月は陽当りのよい室内で13~18度、4月で15~21度ですが、軒下や屋外の培養場では一般にこの温度より低目でしょう。一日のうちでも夜明けと日中では水温に差がありますが、5~6度の開きは普通にみられそれほど心配することはありません(喜入漁協瀬々串婦人部から質問がありました)。といって急に冷い海水にかえたりすることはよくありません。温度の変化の少ない方が糸状体の生育に望ましいことと思えます。

3. 比 重

比重は2.2(1.022)以上が糸状体の生育に適しています。比重が低いと(比重1.8以下)糸状体の生育がにぶるば

かりでなく、病害発生の原因になりやすいです。比重の高い清浄な海水で培養した糸状体が、秋になつて健全な胞子をたくさん作ります。

トロ箱の海水を換水しないで1ヶ月もおくと、比重は30位になります。これは自然蒸発によつて塩分が濃くなつたためですが、比重が30位まではそんなに悪い影響はないようです。それよりも換水の際に急に低い比重の海水を入れることを注意して下さい。このときには、トロ箱に入っている古い海水と同じ位の量の新しい海水をつぎ足して2~3日置き、糸状体を中間の比重に慣れさせてから次に全部換えるようにします。

4. 換 水

成長をうながすために水かえも大切です。梅雨前までにはできたら月に2回位はかえたいものです。

海水はなるべく大潮の満潮時に澄んだ比重の高いものを汲みます。汲んだすぐの海水はトロ箱の海水と温度も、比重も異なつていたので前に述べた方法をとつて換水することです。

これらのためにも比重計、水温計はそなえておくべきです。(赤沼式比重計Bで大体400~500円、水温計は水銀 $\frac{1}{5}$ 目盛で200~300円)

又、換水の際は貝殻表面のゴミやけい藻を布で洗つておとします。けい藻は繁殖すると貝殻の表面を鉄サビ色で蔽い糸状体の生育を阻害します。

しかしけい藻は明る過ぎても余り暗らすぎても繁殖せず、糸状体の生育に適した明るさに大体似ていますので、けい藻が多少発生する明るさが糸状体の生育もよいわけです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 奄 美 短 信 ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

§、36年2月号の中央公論に「藤島宇内」なる評論家が「日本復帰後の奄美群島」というタイトルで、ある程度の資料を集め、両脚をこの大島に踏み入れて、その見聞記なるものを書いている。文中の一つを紹介すれば「自然現象による台風は差程恐ろしくはないが、人工的台風が一番恐ろしい」。

「大島群島の全町村にわたり、保護適正化運動を強力に実施して生活指導につとめたが、被保護世帯は漸増しつつある。全国最高保護率を示す本群島は、生活困窮者の特殊地域ともいえる復興事業の直接的効果による被保護者の減少は期待できない状態にある。5軒に1軒の割合は、奄美復興の美しい名のかげに日本資本主義の構造的矛盾の極限ともいうべき現象があらわれている」

県民の1人として、色々な面で指摘された事項については反省させられる個所もあるが、実際にその困窮者は多い。これら困窮者の上に悠々とアグラを組み融資を受け、結構甘い汁を吸っている人もあると多く聞き及んでいる。この様にして益々所得較差がひどくなる。一例として資料蒐集に一漁村に出かけて組合理事の案内を乞うたところ、日当を要求する程みじめな生活をしている。この人達は都会より遠く離れているところから、ついおいてきばりにされてしまうらしい。いかに陽陰の差があるかがうかゞえられる。

現在大島群島においてサトウキビ価格が政治問題化されている。例年のことではあるが、第一次産業に従事する農村民は社会状況が如何に転換しようとも、宿命的な貧乏を永久に背負っている。これが又国家の政策でもあろうか、月の裏面もわかるよう

になつた現在だが……………。

§ 大島に春の訪れるのは早い。菜の花、彼岸桜はもう過ぎ、今は、スモモの花が満開期を迎え、野に山に白一色の観がある。今年の寒さは格別だつたらしい。オーバーなしで過ごせたものの今季最低気温は日中で5℃を記録した。2月中旬以降になると15℃前後のポカポカした暖かい日が続いている。しかし、2日に1日の割合で雨が降るのはつらい。梅雨期にしては早い様だし、木ノ芽雨とも言え様が、これが3月に入ると黄金ノ森（木ノ芽によつて）を出現し、地上最大の美観を呈する日も近い様だ。内地の人よ!! 観光の地、大島へ来れ
こうなつてくると、ハブさんの顔も痒めることになる。1月中旬に早や第1号が徳之島に出た。被害者が出たと聞くに及んでは、我が身に脅威的戦慄の極をおぼゆ。

Y、T 記

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 各 部 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 漁 業 部

※ 南方瀬魚漁業試験

去る2月11日南方瀬魚漁業試験のため出港した試験船照南丸は3月7日無事鹿児島港へ投錨した。
漁場は南支那海マックスフィールド礁を主とし漁具は1000ヤード網、延縄釣を用いた。約5000kgの火揚げをしたが、初回の試験操業としてはまあ良好と言えるのではないだろうか。概要は3月中旬の各社新聞にも掲載されたが、詳細については本誌別項を参照願います。

※ 八代海調査

西海区水産研究所（在長崎市）が本県照南丸による第2回八代海総合調査を実施するため、照南丸は3月18日鹿児島を出港、8日間の調査期間を終了し3月30日鹿児島へ入港した。

この調査は俗に水俣病と言われる奇病の総合調査であり、調査結果は目下西海区水産研究所において取纏め中である。

※ さば魚体測定

西海区水産研究所の委託により月例となつていゝもので3月6日、13日、20日の3回東海さばの精密測定を実施した。データは西水研に送られ東海さば資源調査の資料となるものである。

※ 南海区水産研究所ブロック技術協議会

3月22日～24日にかけて南海区水研延岡支所において開催された。

協議中特に注目されたのは沿岸漁業振興対策としての国の施策が増殖関係を重点的にとりあげようとする傾向にあることである。

南海区水研では本年度イセエビ等を重点的に研究する計画であり鹿児島ではイセエビ、トコブシ等が考えられている。

○ 調査部

※ 水質汚濁調査

2月14日～17日に実施した米ノ津川水質汚濁調査の水質分析、生物査定を行い、現在取纏め中近日中に関係先へ結果を報告する予定。

又、3月22～25日に肝付川澱粉廃液調査（第3回）

を実施して、現在水質分析を行つている。

※ ブリ仔採捕準備

4月から大隅海峡で開始する予定のブリ採捕用新型網を作製中。ほかに、採捕に関連して餌料の購入手配、小型船の整備等行つた。

※ 養魚指導

生簀式によるハマチ養殖希望者について、海況、方法、その他を指導した。(海瀧、山川)

※ 蓄養試験資料整理

35年度の蓄養試験その後の事業について資料の整理、検討を行つた。結果は事業報告書に掲載の予定である。

※ 「うしお」の検討会を行つた。(3月/3日編集会議)
PR誌として「わかり易い」記事を努めて掲載することとした。

○ 製造部

※ 加工試験

1. 魚肉ソーセージ製造 自2月7日至3月28日の間に6回実施し毎回平均400本の生産をあげた。
2. フィッシュ・ケーキ製造試験 自2月/0日至3月30日の間に5回実施し、経時測定を試料を得た。
3. 残渣利用魚飼料の製造 魚肉ソーセージ製造の残渣物をもつて、その都度加工した。
4. 海苔の機械乾燥 自2月/5日至3月20日の間に5回実施し、雨時の機械効果を認めることができた。

※ 研究指導

- 2月/3日～/6日 志布志、古江地方の煮干、塩干の
現地指導(藤田技師)
- 2月/4日～/7日 出水地方の水質調査(木下技師)

2月21日～23日

大阪市たべもの展覧会に出席、(西技師)

嗜好食品の動向につき視野を新にし、同時にフィッシュ・ケーキのPRに有為な資料を得た。

2月22日～24日

山川、枕崎のかつお加工、残渣利用の現地調査を行う。(白石部長)

現地では頗る活況であるが、これは昨年度不漁の反動による現象と思われる。

2月28日～3月5日

愛媛県に於ける真空包装の加工実態調査(藤田技師)

3月7日～7日

ワカサギ加工の現地指導(藤田技師)

ウナギ池産ワカサギ加工について山川町の要請による。

3月16日～19日

フィッシュ・ケーキの現地講習会に出席(西技師)

青瀬漁協婦人部の要請による。

3月22日～23日

東市来で煮干の「タイリョウダイヤ」の指導

(藤田技師) 県漁連の要請による。

3月23日～25日

東串良で水質調査(木下技補)

3月30日

谷山市水産加工共進会に出席(白石部長)

3月30日～31日

東市来で煮干の「ダリンサン」使用試験(藤田技師)

2月、3月 月間

化学実験 試作品フィッシュ・ケーキのキハツサン

アンモニヤ経時測定

※ 来 訪

2月 / 日 水産高等学校泊教諭水産教育沿革調査の為
" " 小川香料KK営業課長「タイリヨウダイヤ」
の試験依頼

2月 / 6日 福岡通商産業局第1課長外2名
(前) B.H.T用アルコールの特別取扱法について

2月 / 24日 鹿大水産学部太城助教授
真空包装機について打合

3月 / 1日 青瀬漁協竜田専務 加工施設調査のため

○ 養 殖 部

※ ノリ糸状体の培養

アサクサノリ人工採苗試験として、今年秋にタネ付けす
るための糸状体の培養を開始した。

ノリの種類は	アサクサノリ	米ノ津ダネ
		瀬々串ダネ
	スサビノリ	千葉県産
	アルバアマノリ	鹿児島市天保山
	オニアマノリ	坊ノ津町泊産
		西之表市箱崎

の6通りを試験している。

又、3月8日、13日は垂水、瀬々串の果胞子付けを指
導した。

※ アケガイ、イタヤガイの調査

昨年度は加世田市漁協の協力によりツキヒガイの成熟に
ついてはじめて周年調査ができ、ほど産卵期を把握でき
た。今年度は指宿沿岸のアケガイ、イタヤガイについて
ひきつゞき産卵期(20~30日に1回)と分布状況

(年間数回)を調査することとし、4月10日第1回を行つた。なお、この調査は漁政課から委託され、調整規則の検討資料となるものである。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 分 場 日 記 ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

3月中 加工場整備
3月3日～/8日 ひとえぐさ資源調査並びに抄製指導
3月6日～ 9日 いわのり資源調査(徳之島)
3月7日 36年度加工場使用に関する協議会
(瀬戸内漁協)
3月11日 まべ稚貝測定

(22 ページより)

大会発表で「海の園芸化」ということが言われました。海を畑と考へて生産を高めていこうとする傾向はますます強くなることでしょう。それで、これまでの自分だけでよければということでは、漁村における協業の助長はとうてい困難なことです。

昔の規律正しい軍隊でも、要領よく、ずるく、自分だけということが貫ぬかれていたのですから、現世代においては尙更その色彩は濃くなっているものとみてよいでしょう。

漁村においては、釣天狗精神と板子一枚精神のカクテルを飲まされていますから、なかなか社会性に乏しく、人を信用すること、人から信用されることもむつかしくなっているようです。

これからの漁家の所得を高め、漁村を豊かにしていくためには、先ず漁村の人達はお互いに仲よく働き、人からも信頼される人達となるようにならなければ、どうしても困ることになります。で、私は漁村の所得倍増は、先ず漁業者の釣天狗精神をたゞきなおし、板子一枚精神にヤキを入れることから始めなければならぬと思います。

そのためにも、漁村における青壮年層のグループ活動、婦人グループの活動こそ、これらの因習を少しづつでも脱皮させていく力となるものと思います。

東京で行なわれた漁村青壮年婦人研究グループ大会で、青壮年婦人のたゆまぬ研究の実績発表に接し、沿岸漁業はまだまだ改善の余地があるし、それだけにグループ活動の手伝いをする関係者にとつても、はり合いのあるものではないかと独りえつに入つて帰つて来ました。